

## 第 38 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

自由部門

学長賞「いつもの日常」

生活デザイン学科 2 年 1 組 前田幸乃

高校 3 年生の春、ある病気にかかった。

春休みが終わり受験生の年、受験の不安と高校生最後ということで私自身いろんな感情を持っていた。これから勉強を頑張って、最後の高校生活も充実させようと思っていた時だった。ある日の夜、ベッドでくつろいでいると肺の辺りがポコポコと音がする。最初は消化でお腹が鳴っているのかなと思っていた。だが、明らかにお腹からではなく肺から鳴っている音だと思い、母に「肺からポコポコ音がするんじゃないけど…」と相談すると、「え、それ気胸じゃない？」と母は言った。「気胸」という知らない言葉が出てきて怖くなった。詳しく聞くと、母も若い時になったことのある病気らしく、簡単に言うと肺に穴が空いてしまう病気だ。ポコポコという音は、肺から空気が抜ける音だという。その話を聞き、今まであまり病気になったことのない私にとって、怖くて仕方がなかった。次の日、母が昔気胸になった時にお世話になった先生のいる病院へ向かった。病院に着くとすぐ胸のレントゲンをとり、完全に気胸だと分かった。先生は大きな病院で治療した方がいいということで、私の家の近くの大きな病院へ電話し、紹介状を書いてもらった。不安でいっぱいだった私に先生は、優しい笑顔で「絶対治るから！大丈夫！」と言って下さった。その言葉のおかげで、少し安心したのを今でも覚えている。そして、大きな病院へ行き、呼吸器内科の先生と話した。先生が言うには自然に肺の穴が塞がる人もいるらしく、治りかけの可能性もあると考え、一日様子をみることになった。次の日の朝、起き上がるのが苦しく、ベッドから動くのにも一苦労だった。しかし、夜になると不思議と痛みが消え、穴が塞がったのかもしれないと思っていた。次の日、病院に行きレントゲンを撮ったところ、左の肺が昨日より縮まっているということで、治療しなければいけないと言われた。その治療は胸の横に小さな穴を開け、そこにチューブを入れ肺から漏れた空気を外に出すものだった。局所麻酔だったためチューブが入る感覚がわかり気持ち悪かったと同時に痛みもあった。治療が終わると、体にチューブが刺さっていて見たことのない機械がつながっていた。その機械には少量の水が入っていて、肺内で空気が漏れるとブクブクと気泡が出る仕組みになっていた。ブクブクという音がなくなると、肺の穴は塞がったということになる。移動は車椅子で、変に動くとチューブが刺さっている部分が痛む。急な事があり過ぎて、理解が追い付かなかった。気づいたら病室にいて、入院することになった。その時期はコロナウイルスが流行っており、面会が規制されていたため、母は 1 時間ほどして帰っていった。それから退院するまで、看護師さんと先生しか病室を出入りすることはできなかったため、基本ずっと 1 人だった。1 人静かな病室にいることはとても寂しく、家族や友達にも会うことが出来ないのは一番辛かった。少し落ち

着いてから、友達からメールが来ていた。そのおかげでとても元気づけられたし、頑張ろうという気持ちになった。毎日当たり前のように学校へ行き、友達に会って勉強し部活に行くという当たり前の日常が急に出来なくなり、健康であることの有難さをその時身に染みて感じた。そして、数日経つと不思議と体に刺さったチューブは違和感がなくなり、体の一部のようにになっていた。しかし、何日経っても肺の穴は塞がらなかった。息をするたびに聞こえる肺から漏れる空気音。早く元気になって学校に行きたい。早く皆に会いたいと毎日思っていた。1週間経っても穴が塞がらなかったため、手術をすることになった。人生で初めての手術だった。手術は怖いという気持ちより、早く治りたい気持ちが大きかった。全身麻酔で目が覚めると手術は終わっていて、麻酔が切れてからも特に気持ち悪さはなかったが、息を吸うのも痛くて深呼吸をするのが怖いくらいだった。次の日、空気漏れはないということで、体に刺さったチューブは抜くことになった。病室に先生が来て、その場でチューブを抜くらしく、麻酔があるのかと思っていたが、麻酔なしでチューブを抜いた。これが多分今までで一番痛かったと思う。そして、1日経ち退院してもいいと言われた。まだ傷が痛くて治ったという自覚がなかったため、退院が早すぎて正直驚いた。退院して一日後、久々に学校へ行った。友達の中には泣いて喜んでくれた子もいて、とても嬉しかった。

このような経験をし、いつも当たり前のように過ごしている日常は全く当たり前ではなく、健康で生きていけるということはとても有難いことなのだと心から感じた。人はいつどうなるか分からない。だからこそ、一日一日を大切に後悔のないように過ごしていくべきだと思う。そのために、「明日やろう」ではなく「今やろう」に変えることから始める。そして、いつも当たり前のようにいる周りの人達も当たり前ではない。自分の周りにいてくれる人達を大切にすること、健康でいること、いつもの日常は当たり前じゃないということ、これらのことを心において、毎日を生きていきたい。